

歌の話

折口信夫

青空文庫

うたはなし
歌の話について

この度、高濱虚子さん・柳田國男先生と御一しよに、この一部の書物を作るこ
とになりました。その高濱さんの御領分の俳句と同様に、短歌といふものは、ほん
とくに、日本國民自身が生み出したもので、とりわけ、きはめて古い時代に、出來上
つてゐたものであります。さうして、それが偶然、私の先生でもあり、またあなた方
のこの文庫におけるおなじみでもある、柳田國男先生がお書きの諺の成り立ちとも、
原因が並行してゐるのは、不思議な御縁だとおもひます。

一、短歌の起り

短歌は、唯今では一般に、うたといつてゐます。けれども大昔には、うたと名
づくべきものが多かつたので、そのうち、一番後に出來て、一番完全になつたもの
が、うたといふ名を専らにしたのであります。

かういふと、不思議に思ふ方があるかも知れません。あなた方の御覽の書物には、たいてい短歌の起りを、神代のすきのをの尊のお作からとしてゐるでせう。もちろんこれは、古くからのいひ傳へで、あなた方が、古代と考へてゐられる奈良朝よりも、もつとく以前から、さう信じてゐたのです。だからその點において、そのお歌が、第一番のものでなくとも、何も失望する必要はありません。

短歌の出来るまでには、いろいろな形をとほつて來てゐます。第一に、世間の人は、短い單純なものが初めで、それが擴がつて、長い複雑なものとなるといふ考へ方の、癖を持つてゐます。ところが、物質の進化の方面と、精神上のことゝは反對で、複雑なものをだんだん整頓して、簡單にして行く能力の出來て來ることが、文明の進んでゆくありさまであります。短歌などもそれで、日本の初めの歌から、非常に整頓が行はれくして、かういふ簡單で、思ひの深い詩の形が、出來て來たのであります。

二、諺と、歌と

今いまの人の、考かんがへることの出来できないほど古ふるい、遠とほい祖先そせんの時代じだいには、稱となへ言ごとといふものが
 ありました。それが、も少し進すすむと、ものがたりといふものになつて來きました。さうして、
 この二ふたつながら、竝ならんで行おこなはれてゐました。その稱となへ言ごとが、今こんにち日にちでも、社やしろ々くの神かみ
 主しさんたちの稱となへる、祝詞のりとなのであります。この二ふたつの言葉ことばは、元もと、日に本ほん古こ代だいの神かみ様さま
 のおつしやつた言葉ことばとして、信しんじられてゐたのですが、そのうち、だん／＼その言葉ことばの
 うちにもつと、押おしつめた短みじい部分ぶぶんを、神かみ様さまの言葉ことばと考かんがへ、その外ほかの言葉ことばを、輕かるく考かんがへ
 て來くる傾かたむきが出來できて來きました。だから稱となへ言ごとのうちにも、神かみのお言葉ことばがあり、ものがたり
 のうちにも、神かみのお言葉ことばが挿はまされてゐるもの、と考かんがへ出だしたのであります。この稱となへ言ごとの
 うちのある部分ぶぶんが、諺ことわざとなり、ものがたりの肝かん腎じんな部分ぶぶんが、歌うたとなつたのであります。
 神かみ様さまと申まをし上げる方かたは、尊たふとくもありまた、恐おそろしくもある方かたで、われ／＼の祖先そせんにおつ
 しやつた言葉ことばは、祖先そせんの人ひとたちが恐おそれ慎つんで承うけたまはり、實じつ行こうしなければならぬ命めい令れいで
 ありました。ですから、稱となへ言ごと全體ぜんたいが、元もとは命めい令れいの意味いみを持つてゐました。その長ながい
 命めい令れいの言葉ことばのうちに、それを押おしつめたものが出來できて來きたことは、既すでに申まをしました。こ
 れが、たいてい古ふるくは、大だい體たい二ふたつの句くに、纏まとまるものだつたようです。ところが、その
 稱となへ言ごとから變かはつた、ものがたりのうちのうちたも、その理りくつをいへば、意い味みがはつきりし

て來るとおもひます。つまり、神様の仰せに對する、お答へであります。いひ換へて見ると自分の心がわかつて頂くように、説明をし、お願ひをし、お詫びをするもので、根本の精神においては、このとほり、私どもは服従申してをります、といふ誓ひの意味になります。

ですから諺は、命令の意義から、だんく變化して、社會的の訓戒あるひは、人間としての心がけを説くといふ方面に、意味が變化して來ました。それと共に、時代が移ると、言葉の意味や、昔にいひ習はしたわけが、わからなくなるために、後世では、なんの理くつもわからない『いひ習はし』となつてしまつたのであります。このことは長く申さずとも、柳田先生のお話で、おわかりになること、おもひますから、私の分擔に、關係の深いところばかりでやめておきます。

さて歌は、どこまでも、自分の心を詳しく、相手の心を牽くようにいひ出すものであります。そして、低い神様、或は位置の高い人間から、神様に申し上げる言葉が、次第に、人間どうしのいひかけいひあはせる、かけあひの言葉に、利用せられて來ました。さうして、神様の言葉すらも、やはり、歌で現されることになりました。それは大方、三つの句の形になつたものらしく考へられます。

三、歌のいろく

この三つの句の形の歌を、後には、片歌といつてゐます。これは、歌の半分といふことでなく、完全でない歌といふことであります。中には片歌を、短歌の半分といふように思つてゐる人もあるが、これが完全になると、旋頭歌（せんとうかとは読みません。習慣で、せどうかといふのです）といふ形が出来ます。

片歌は、三句から出来てゐて、一番めの句が五音、二番めの句が七音、第三の句がまた七音、といふふうになつてゐるのが普通で、その音數には、多少の變化があります。これは、歌ひ延したり、縮めたりしたからでせう。

神武天皇が、大和の國のたかさじ野といふところで、後に皇后様になられた、いすけより媛といふお方に、初めてお會ひなされた時、お伴のおほくめの命が、天皇様の代理で、お媛さまのところへ歩み寄つて、ものをいひに行くと、いすけより媛は、おほくめの命の目のさいてあるのに氣がつかれて、歌をうたひかけられました。目をさくとは、眦を、刺のようなもので割いて、墨を入れて、黥をすることをいふ、古い言葉であります。

その文句は、昔の大學者たちも、わからないと申してゐる、むつかしいもので、これから先、あなた方のうちから、説明して下さる人が、出て来るかも知れません。

あめつゝちとりましと、何故 黥ける 利目

お前の目は、なぜそんなに黥がしてあるのか、といふ以上に、確かな説明の出来た人がないのです。

これに對して、おほくめの命は答へました。

をとめに たゞにあはむと わが黥ける 利目

あなたのような美しい、若いお嬢さまに會ふために、私が黥をしておいた、この黥の黥です。

なんのために、黥することが、さうした目的に適ふのかわからないが、歌の意味はともかく、さうに違ひありません。御覽のとほり、初めの句が、四音になつてゐるが、ともかく、5・7・5といふ三つの句の形を、基礎としてゐます。これが、われ／＼で知れる限りの、歌の古い形で、このように五音でなく、四音であるのと反對に、五音・七音であるところを、音數多くしたものもあります。現に、この歌と同様に、おほくめの命と神武天皇とのかけあひに謠はれたといふ歌が、それでありませう。

やまとの たかさじ野を、なゝ行く をとめども。たれをしまかむ（おほくめの命）

×

かつ／＼も、いやさき立てる 長をしまかむ（神武天皇）

この大和のたかさじ野を、七人通るをとめたち。そのうちの誰を、お后になさいますか。

ちつとばかり先になつてゐる、あの 年長者を、後にしよう。

この二つの歌について見ると、片方は、4・6・4・5・7といふへんな形になつてゐるが、大體、短歌の5・7・5・7・7といふのと、句の數も似てゐます。それでは、これが短歌かといふと、第一、片歌の約束に叛きます。片歌は、片歌どうし合せるもので、けつして、短歌と一組みにはなりません。さうすると、おほくめの命の歌も、片歌の音數を増して、早く謡はれたものとおもふ外はありません。最初の一句は、『やまどのたかさじ野』の十音から出來てゐます。二番めの句は、『なゝ行くをとめども』の九音が、七音の句の長さで謡はれた、といふことが考へられます。さうして見ると、この時、二對の片歌の、かけあひがあつたのです。けれども、うっかり見ると、そのうちに、短歌の古い形のようなものが、混つてゐるようにも見えます。もちろん、か

ういふ音数の多い片歌も、三句から出来てゐるのだといふことを忘れて、五句になつたところからも、短歌は、出来て来るのであります。だから、この長い片歌は、短歌の歴史の上から、疎かに出来ない材料であります。

四、やまとたけるの尊のこと。竝びに旋頭歌

おなじような片歌の話が、やまとたけるの尊にもあります。この尊東國平定の時、甲斐の國酒折の宮に宿られて、火を燃してゐた翁に、いひかけられました。

にひばり つくばを過ぎて、いく夜か 寝つる

あの新治の近邊の筑波をとほり過ぎて、今夜で幾晩寝て來たとおもふ、といはれたのです。

かゝなへて、夜には こゝの夜。晝には とをかを

指折り屈めて勘定して、今晚は、夜で申せば、九晩。晝で申せば、十日を経過いたしましたことよ。かういふお答へをしたのです。

これは、前の神武天皇様方の御歌よりも、もつと名高く、傳はつてゐます。それは、

この二つの片歌を連歌（れんが）といふものゝ初めだ、と信じてゐるからであります。ところが、さういふふうにかんがへるのなら、もつと時代の古い、神武天皇頃の片歌問答の方が、連歌の初まりだ、といつてよいわけではありませんか。まづ、日本の歌において、長い形のものがたりから、次第に變化して、長歌（ながうた）といふものが出来て来た一方に、そのうちえきすとも、えつせんすともいつてよい片歌が、二つ合さつて、旋頭歌といふものに發達して行くと同時に、片歌自身が、短歌を作り上げるように、次第に、音の數を増し、内容が複雑になつてゐました。私の話は、短歌のみならず、日本の歌の大凡に互つて、知識をお附けしたいと思ふのですから、こんなことから、初めたわけです。それで一口だけ、旋頭歌について申しませう。この歌の形は、つまり、前問の歌を一つとすれば、それなのです。萬葉集から例をひいて見ると、

新室を踏み鎮め子が 手玉鳴らすも。

玉の如 照りたる君を、内にと まをせ

新築の家を踏んで、屋敷のわるい魂を鎮め舞ふ女の子が、手に捲きつけた玉を、今鳴らしてゐることよ。その玉のように、輝やいていらつしやる美しいお客様を、

どうぞ内らへ、と御案内申し上げてくれ。

このとほり、三番めの句で、かつきりと切れて、四番めの句から、新しく、同じ形をくり返してゐます。それで、頭の句に旋る歌といふ意味で、旋頭歌と名づけられたのであります。中には旋頭歌が、まだ片歌の一組であつた時の姿を、残してゐるものすらあります。やはり萬葉集の、

水門の葦の末葉を 誰か た折りし。

わが夫が振る手を見むと われぞ たをりし

川口の、葦のたくさん生えてゐる、その葦の先の葉が、みんなとれてゐる。これは、誰が折つたのかと申しますと、それは、私です。私の夫なるあなたの、私を見つけてあひずに振つていらつしやるお袖を、よく見ようと考へて、私が折つたのです。これなどは、一首のうちに、自問自答のように、歌つてあります。

五、すさのをの尊の短歌

やくもたつ いづもやへがき。つまごめに 八重垣つくる。その八重垣を

この名高い、すきのをの尊のお歌は、實は、よく意味がわからないのです。でも普通はかう説明してゐます。

幾すぢもの雲が、どん／＼と騰つてゐる。その現れてゐる雲の廻つて作つた、幾重の垣のような雲。私の妻を中に入れるために、幾重もの垣を作つてゐる、その幾重もの垣よ。これがわれ／＼の結婚を祝ふ自然のしるしである。

細かいところになると、昔から多少、別々の意見はあつても、大體かういふふうに、意見が一致してゐます。ところが、私にいはせると、意味が大ぶん違つて來ます。

出雲人の作つた、幾重にも取り廻す、屏風・張の類よ。われ／＼、新しく結婚したものを包むために、幾重の圍ひを作つてあることよ。あゝ、その幾重の屏風・張よ。

このやくもたつといふ言葉が、歌の上でいふ枕詞なのです。すなはちこの場合は、いづもといふ言葉を起すための、据ゑことばなのです。枕詞は、元の意味のわかるのもあり、わからないのもありますが、わかるのは、大體に、新しいものゝようです。このやくもたつなども、古い書物の説明にさへ、幾すぢもの雲が立ち圍んだところから、いはれたものとしてゐます。けれども、それはいけないので、ほかに、いづもといふ言葉

と、特別の關係があつたに違ひありません。

これは結婚に先立つて、新しい家を建てる、その新築の室の讚め言葉で、同時に、新婚者の幸福を祈る意味の言葉なのです。それはともかくとして、この歌は、あなたが方がお読みになつても、大體わかるほど、意味がよく通じます。ところが、この歌よりも、遙かに新しい時代のたくさんな歌が、けつしてあなた方ばかりでなく、大人の、しかも専門の學者たちにさへも、わからないものが多いのです。ちよつと考へても、時代が新しくなるほど、歌がわからなくなるといふような、不自然な事實を、あなた方はともに、うけ入れますか。だからこの歌は、遙かに後世、短歌が盛んになつて後、行はれ出して、その作つた人もわからなくなり、また、非常に重々しい力のあるものと信じられた時代に、こんな歌だから神代の神様で、ことに出雲に關係深い、名高い方のお作だ、と信じられたものに違ひはなからう、と考へてゐます。

大昔の歌には、この歌に限らず、歴史では傳へてゐても、作つた人は別であり、時代も違つてゐると見ねばならないものが、だん／＼あるのです。

私はこのお歌が、神武天皇のお歌だといふ片歌よりも、古いものだとは、あるひはもつたないかも知れないが、信じるわけにはまゐりません。短歌の形といふものは、も

つともつと、遅れて出来たもので、すきのをの尊はもちろん、神武天皇も、やまとたけるの尊も、御存じにならなかつたに違ひない、と考へてゐるのです。

六、景色を詠んだ歌

狭葦川よ 雲立ちわたり、うねびやま 木の葉さやぎぬ。風吹かむとす

さる川から、雲がずっと立ち續いて、この畝傍山、その山の木の葉が、騒いでゐる。今、風が吹かうとしてゐるのだ。

畝傍山 晝は雲と居、ゆふされば、風吹かむとぞ 木の葉さやげる

畝傍山。それには、山の木の葉が、晝は、雲がかゝつてゐるように、ぢつと静まつてゐて、日暮れが來ると、風が吹き出すといふので、その木の葉が騒いでゐる。

この二首の歌は、疑ひもなく、景色を詠んだ歌であります。畝傍山附近の、小さな範圍の自然を歌つた、いはゆる敘景詩といふものであります。ところが、この歌を讀んだぐけで、別の氣持ちが浮びませんか。それはなんだか、この歌のうちに、違つた氣持ちが隠されてゐる、といふ氣分の起ることでありませぬ。歌の表面は一種の譬へで、何か別

のことがいつてあるのだらうといふ心持ちが、起りませんか。きつと起るとおもひます。それで昔の人も、このたゞ敍景の歌に過ぎない、二種の歌に對し、かういふ傳へを語つてゐました。

神武天皇がおかくれになつて後、先に申したいすけより媛が、自分のお生みになつた三人の皇子たちを、殺さうとするものゝあることを、むきだしにいふことは出来ないから、かういふふうに仄めかして諭されたのだ、と古事記といふ書物にさへ傳へてゐます。日本の古代の人々は、かういふふうに、一首の歌についても、何か神の心あるひは、諭しが含まれてゐるのだ、といふ考へ癖を持つてゐました。その習慣が、久しく續いて來て、ごく近代に及んでゐます。だから偶然起つて來た、一つゞきの歌の文句にも、たゞ歌の表面の意味以外に、何か變つた内容がありそうな感じを持つたのであります。

この歌は別ですが、多くさうしたふうにどこからともなく、風の吹き起るようにはやつて來る歌を、不思議な氣持ちで、びく／＼しながら、耳を立て、聞いてゐました。さうしてさういふ種類の歌を、一般に、わざうたと申しました。字では、童謠とあて字をします。が、ほんとうの意味は、神の意志の現れた歌、といふことらしいのです。たゞ多

く子どもたちが、さういふ歌を、無心で謠ひ擴げて行くところから、あて字をしたのでありませう。この二首の歌も、恐らく、いすけより媛のお歌でも、お作でもなく、またさうした悪人が、騷動を起さうとしてゐる、注意をなさい、といった意味のものでありますまい。それにしても、こんなに古い時代に、このような紋景の歌が、歌はれるわけはないのです。その證據は、これから以後、ずっと遙かな後まで、ほんとうに景色を詠んだ歌といふものが、出て來ないのであります。いくらか、さうしたものと見えるのは、或時仁徳天皇が、吉備のくろ媛といふ人を訪問せられたところが、青菜を摘んでゐたのを見て作られたといふお歌であります。

山縣に蒔ける青菜も、吉備びと、共にし摘めば、たぬしくもあるか
 天子の御料の、畑のある山里に蒔いた青菜も、その吉備の國人と、二人で摘んでゐると、氣がはれ／＼とすることよ、といふ意味のことをいはれたのです。

これなどは、まづ自然のものに對して、緻密に觀察をしたもの、書物に出たはじめといつてよからうとおもひます。山がたといひ出して、土地の様子からその性質を述べて、そこに青々と芽を出した野菜の色を、印象深くつかんで、示してゐます。それ以前の歌は、皆表面は景色を詠んだように見えても、ほんとうに味はつて見ると、

たゞのうはつただけのところ、實際景色を見据ゑたものだ、といふことが出来ません。

かういふふうに、ごくわづかづ、自然に對する見方が据つて來ました。そして、ほんとうの敝景詩といふものが出來上るのは、奈良朝に近くなつてからのことであり、或は、もつと精確にいふと、奈良朝になつてからといはなければならぬかも知れません。それにも拘らず、神武天皇の時分に、ちゃんとあゝいふ調つた、景色の歌があるといふことは、どうしても、不自然なように考へられます。だからこの二首のお歌も、實は後世のもので、なんだか、へんな暗示を感じさせるところからして、しぜん、畝傍山・さる川——さる川は、いすけより媛のお屋敷のあつた所——などいふ地名から、歴史上の事實に結びつけて、考へられたものだとおもひます。

七、旅行の歌

それではどうして、景色を詠む歌が生れて來たかといふと、それはわれ々の祖先が、よく旅行をしたからです。或は、旅行をした時と同じ心持ちで、歌を作る場合があ

つたからです。旅行をした先で、いつも新しく小屋がけをして、それに宿りました。さうしてかならず、その小屋をほめ讃へる歌を詠んで、宴會を開きました。これを、新室の宴といひます。その習慣は、旅行をしないで、一年のうちに、かならず一回以上は、自然の村にゐて行つたものでした。毎年、田の穫り入れがすむと、やはり家を作りかへ、或は屋根を葺き替へたりして、おなじく、新室のうたげを行ひました。かういふ場合にはかならず、建て物の内外にある物を、目に觸れるに従つて詠み出して、それが最後に、一つの喜びの氣持ちに纏まる、といふふうな作り方になつてゐました。

譬へば、萬葉集にある皇極天皇のお歌として、傳はつてゐるものがそれです。

我が夫子は假廬作らず。かやなくば、小松が下のかやを刈らさね

私の大事の方は、假り小屋を作つていらつしやる。がどうも、葺き草がないので、困つてゐられるようだ。そんなにかやがないならば、向うに見える、あの小松の茂つてゐる、その下のかやをば、お刈りなさいな。

これなどはいかにも、旅行中の新室の宴らしく、明るくてゆったりとした、よいお歌であります。現在かやが、向うに生えてゐる、と教へてゐられるではありません。

少くとも、さうして落ちついて宴會を開く數時間前までは、皆で苦勞して、かやを刈り集めてゐたのです。その勞力を思ひ出してのお歌なのですが、その席上にある人は、皆この經驗をつい今の先にしたのですから、このお歌を、きつと、自分自身の氣持を詠んで貰つたように、愉快な氣がしたに違ひありません。家のうちにゐて、その内外の様子を詠むといふところから、景色の歌が生れて來るのであります。それが次第に進んで、旅行中の歌にはほんとうに自然を詠みこなした立派なものが、萬葉集になると、だん／＼出て來てゐます。

いそのさき漕ぎ廻み行けば、あふみの海 八十のみなとにたづさはに鳴く
 岩はなをば、漕ぎ廻つて行くごとに、そこに一つづゝ展けて來る、近江の湖水のうち
 のたくさんの川口。そこに鶴が多く鳴き立てゝゐる。

やその湊といふのは、ひよつとすると、土地の名前で、今の野洲川の川口をいつたの
 かも知れませぬ。さうすると、歌の意味が、しぜん變つて來ます。がどちらにしても、い
 かにも鶴の啼いてゐることが、生き／＼と寫されてゐます。これがまだ、奈良朝になつ
 たかならない前の歌なのです。高市黒人といふ人の作つたものであります。この人は、
 日本の紋景の歌の、まづはじめての名人といつてもさし支へのない人で、この後は

次第しだいに、かうした方面ほうめんにすぐれた人ひとが出て來きます。山部赤人やまべのあかひとなども、この黒人くろひとに似にせて作つくつたと思おもはれるものがあります。譬たとへば、

和歌わかの浦うらに潮しほみち來くれば、瀉かたをなみ、葦あしべをさして鶴鳴たづなきわたる

和歌わかの浦うらに潮しほがさして來くると、遠淺とほあさの海うみの干瀉ひがたがなくなるために、ずっと海岸かいがん近くちかに葦あしの生はえてゐるところをめぐけて、鶴つるが鳴ないて渡わたつて來くる。

これは、赤人あかひとの名な高い和歌わかの浦うらですが、黒人くろひとに、既すでにそのお手本てほんがあります。

さくら田たへ鶴鳴たづなき渡わたるあゆち瀉かた。潮干しほひにけらし。たづ鳴なき渡わたる

さくらといふところに、田たの作つくつてあるところへ、鶴つるが鳴ないて渡わたつて行く。その手前てまへにあるあゆち瀉かた。そこは潮しほが退ひいてゐるに違ちがひない。それであゝいふふうに、鶴つるが鳴なき渡わたつて行くのだ。

どちらも今こん日にちから見みると、少すこしおもしろみが勝かち過すぎました。趣向しゆこうを凝こらしてゐるところが露骨ろこつに見えるが、赤人あかひとの方は、よく讀よみ返かへして見みると、いかにもごたく／＼してゐるでせう。殊ことに、二番にばんめの句く、三番さんばんめの句くに、注ちゆう意いなきさい。おなじく趣向しゆこうを凝こらしたところはあつても、さくら田たへの方は、いかにもすすきりと、頭あたまに響ひびくように出來できてゐます。これはやはり、親おやと子こと、師匠ししやうと弟子でしと、先輩せんぱいと後輩こうぱいといふほどの違ちがひが現あらは

てゐるのであります。でも、この赤人といふ人は、かういふ傾向の景色を詠む歌ひてを亡くして、だんく自分の進むべき領分を見出して行きました。そしてつひには、日本の歌が、赤人の風のものになる時機を、待ち届けたのであります。そのことをお話しするのは、今一人、赤人の先輩とも、先生ともいはなければならぬ、柿本人麿のひとまろ

八、日本短歌の第一人者、柿本人麿

今度のお話では、短歌と並び稱せられてゐる長歌のことは、省きたいとおもひます。が、これは、大體第一章のところで述べてある物語の歌から、變化して來たものと見てさし支へありません。

柿本人麿は、平安朝の末になると、神様として祀られる程の尊敬をうけるようになりました。それは、短歌の上の成績によつてでありませんが、人麿が生きてゐた時分、或はその後、久しく人麿の評判の高かつたのは、この長歌を作る力が非常にあつた點でありました。だがそれと共に、人麿が短歌にすぐれてゐたといふこと

も、誰も疑ふものもなく、更に私などからいふと、長歌よりは寧ろ、短歌の方で、立派なものをつくさん残してゐます。がこの人の功勞は、それには限りません。實のところは、人麿が出て、短歌といふものが、非常に盛んになつたのであります。人麿の歌を見ると、なるほど天才といふものはえらいものだといふ心持ちが、つく／＼します。あなたの方にも、たゞ昔からのいひ傳へだからといふ以上に、ほんとうに、人麿のねうちを知つてほしいと思ふのです。

實のところ人麿が出るまでは、短歌は、まだ海のものとも山のものともきまらないありさまであります。この人が短歌といふ形を、はじめて獨立させたものと見て、まづさし支へはないと考へます。あんまりえらい人だつたので、人麿が死ぬとももなく、いゝ歌であれば人麿の歌だ、と考へるようにさへなつて、今日残つてゐる萬葉集の人麿の歌といはれてゐるものにも、どこまで、ほんとうに當人の作物か、判斷のつかぬところがあります。それと共に、人麿の歌だと傳へられてゐないもので、人のために代つて作つた、この人の歌も非常にたくさんあるようにおもひます。こゝには大體、まづ人麿に違ひないと信じられてゐる歌について、少し申しませう。

あらたへの ふぢえが浦に鱸釣る海人とか見らむ。旅行くわれを

あまさかる 鄙ひなの長道ながぢゆ 戀こひ來れば、明石あかしの門とより、大和やまとしま見みゆ
外ほかにも、とほつてゐる舟ふねがある。自分じぶんも舟ふねに乗のつて、旅たびをしてゐる。あゝして、向むかう
とほつてゐる舟ふねから見みれば、われ／＼をばこの藤江ふちえの浦うらで、鱸釣すくきりりをしてゐる海人あまの
村人むらびとと見みてゐるだらうよ。この旅行りよこうをしてゐる私わたしであるのに。

こゝのあらたへのといふのは、やはり枕まくら詞ことばです。たへは着物きものといふことで、手觸てぎはり
の粗あらいものが、あらたへなのです。さうした着物きものは、山やまの藤ふちの織維せんいで織おつたものが多おほかつ
たので、藤江ふちえのふぢを起おこすために、あらたへのといふ言葉ことばを、据すゑたのであります。次つぎ
の歌うた、

われ／＼は、遠とほみやこはな 地方ちほうの長ながい距離きよりをば、焦こがれてやつて來きた。そして、今いま
この時ときに氣きがつくと、この明石あかしの海かい峽きょうから内うちらに、畿内きないの山やま々々が見みえてゐる。
あまさかるは、やはり枕まくら詞ことばで、ひなのひとといふ語ごを起おこしてゐます。意味いみは、天てんに遠とほ
くかゝつてゐる日ひといふことなんです。それから、ひなといふ言葉ことばには、意味いみの上うへでは無む
關係かんけいで、たゞ音おんの上うへに、續つづけて來きたのであります。

やまとしまといふのは、天皇てんのうの御領地ごりょうち或は、自分じぶんの親したしい國くにのことを、しまといつ
た時代じだいに、やまとの國くに或は、畿内きないの國くにをさして、やまとしまといつたのです。けつして、

海 中の島をさしたのではありません。

かういつて來ると、歌が非常に、おもしろくなく聞えるかも知れませんが、一度この意味を頭に入れて、その後度々、読み返して見て下さい。さうすると、自然にわかつて來るでせう。譬へば、こんな歌になると、さうしななければ、けっして味びを知ることが出來ません。

印南野も 行き過ぎがてにおもへれば、心戀しき加古の島見ゆ

なんだかはじめての方には、外國語でも聞いてゐる感じがするかも知れません。印南野といふのは、播州の海岸に廣く互つた地名で、加古川を中心として、印南郡加古郡に擴がつてゐます。そして、歴史上名高いところとなつてゐます。この歌では、ひとまろが都から西へ下つたのか、それとも遠い國から都へ戻つて來たのか、その事情がわかりませんが、この歌を考へる上には、別にさし支へはありません。私はまづ、遠い國へ行く時のものとして見ておきませう。

だんく〜とほり過ぎて行く。どこも皆なごり惜しいが、今とほつてゐる播州の海岸の印南野も、とほりすぎきれないほどになつかしく思つてゐると、ちようど向うの方に、なんだか、近よつて行きたい心を起させる、加古川の口の、加古の島が見え

てゐるといふ意味です。

九、人麿の歌の傳へにいろいろあること

この人の歌は名高かつたので、歌によつて、いろいろに文句が變つて傳はつてゐます。この歌にも、五番めの句が、『かこのみなど見ゆ』といふふうに書いた本もありました。そしてその方が、歌としては遙かに勝れてゐると考へます。

沖を通つてゐて、印南野の草原を、遙かに見てゐる。そのうちに、遠く加古川の川口が見えて來た。あの川口は、知つてゐるんだ。なつかしい舟泊りのあるところだ。

心細い氣持ちで眺めてゐるのです。さあこれで、も一度、讀み返して下さい。

こんな歌をあげて來ると、人麿といふ人は、かなしい歌ばかり詠んでゐた人のようですが、なか／＼どうして、どつしりとした強い歌を、たくさん残してゐます。寧ろこの方が得意であつたのかも知れません。

おほきみは神にしませば、あまぐもの雷が上にいほりせるかも

この歌は、持統天皇のお伴をして、雷の岳——また、神岳ともいふ——へ行幸なされた時に、人麿が奉つたものなのです。

天皇は、神様でいらつしやる。それでこの普通ならば、空の雲の中で鳴つてゐる雷、その雷であるところの山の上に、小屋がけをして、お泊りになつてゐることよ。えらい御威勢だ。

かういふふうに、天皇を讚美してゐます。この人の歌は、自然物を寫す場合にも、自分の感情を述べる敘情詩といふものゝ場合にも、實に見事に出来てゐるので、どちらがよいといひ切ることは出来ませんが、世間では、人麿は感情をうたふのに達してゐた人だ、といふことにしてゐます。私はさうも思はないが、先に申した黒人と較べて話すのに便利なため、まづ普通の考へを採用しておきませう。

一〇、山部赤人

この二人の先輩の歌を手本にして、だんく自分の本領を出して來たのが、先に述べた山部赤人なのです。この人の歌では、特別に名高いものとして、

み吉野の象山の際の木ぬれには、こゝだも さわぐ鳥のこゑかも
 ぬばたまの 夜のふけ行けば、 楸生ふる清き川原に、 千鳥頻鳴く

これなどは、人も認めまた實際にねうちもあるものです。

一 體文學などいふものは、一人がよいといひだすと、いつまでもその批評が續くもので誰も彼も、前の人の言葉から離れて考へることの出来ないものであつて、存外つまらないものでも、昔の人が讚めたのだからといふので、安心してよいものだと思つてゐることがたびゝあります。赤人で例を取つて見ると、先の、

和歌の浦に潮みち來れば、 瀉をなみ、 葦べをさして鶴鳴きわたる

のようなもので、これがよいと思ふようでは、あなた方の文學を味ふ力が足りないのだと反省して貰はねばなりません。他人がよいからよいと思ふのは、正直でよいことですが、さういふのを支那の人はうまくいひました。それは、耳食といふ言葉で、人がおいしいといふのを聞くとおいしいと思ふのは、口で食べるのではなくて、耳で食べるのだ。見識がないといふ意味に使つてゐます。書物はたくさん讀まなくても、耳食の人にならない用心が必要です。歌を解釋して見ると、

吉野川の傍にある象山の山のま、すなはち空に接してゐるところの梢を見上げる

と、そこには、ひどくたくさん集つて鳴いてゐる鳥の聲、それが聞える。

これなどは、高い山の上を見つめて歌つてゐるので、口から出放題に作つたものでは、
 けつして、かうはうまくゆきません。つぎのは、

ぬばたまのは、黒いものゝ枕、それで、夜にも關係があります。

夜がだんく更けて來ると、晝見ておいたあのきさゞげの木のたくさん生えてゐる、
 そして、景色のさつぱりしてゐたあの川原に、今この深夜に、千鳥がしつきりなく鳴

いてゐる。

これも夜靜かに室のうちに籠つて、耳を澄し、眼には、その鳥の鳴いてゐる場所の光
 景を、明らかに浮べてゐるのであります。こんな歌になると、赤人は、人麿にも黒
 人にも負けることはありません。ところが、だんく變化して行つたと見えて、世間か
 ら騒がれてゐるかういふ歌を作つてゐます。

春の野に すみれ摘みにと來し我ぞ、野をなつかしみ、一夜寢にける

あすよりは 春菜摘まむと標めし野に、きのふも 今日も 雪は降りつゝ

かういふ歌が、先にいつたとほり、後世持てはやされて、これを學ぶ人が多かつたの
 であります。後の歌からいひませう。

二三日前に、私はかういふ計畫をした。あしたからは、こゝで春の若菜を摘まうと繩張りをしておいたこの野に、いよく摘まうと思つて、朝出て見ると、雪が降つてゐる。きのふも、降り／＼してゐた。今日も、降り／＼してゐる。

ちよつとおもしろいとおもふでせう。そのおもしろいと思ふ心が、文學から縁遠いものなのです。この歌の興味は、ごく際どい工夫にあるので、若菜を摘まうとしてゐた心に、自然が適つてくれないといふことを、自分勝手に、つごうよく作り直したものであります。或はさういふふうな趣向で作れば、人がおもしろがるかと考へて作つてゐる痕が、ありありと見えてゐます。でもこの歌などは、まだよろしい。はじめの歌などになると、とてもいけません。

ゆふべ、實はこの春の野へ、れんげ草を摘みにと思つて來た、その自分が、あんまり野のなつかしさに、家へも歸らないで、つひ／＼、そこで一晩寝て暮したといふ意味です。

この頃のすみれは、今のれんげ草、もつと普通に、げんげといつてゐる花で、あの紫のすみれではありません。

一一、文學のねらひどころ

そんなことはさておいて、この歌の考へてあるところは、ほんとうのことではありませ
 ん。あなた方のうちには、すでに風流といふ言葉を御存じな方がありませう。かうい
 ふのが、風流な歌といふのであります。

けれども實際、われ／＼の生活とは關係のないことを歌つてゐるので、文學者
 だから、普通の人は違つた考へをしなければならぬと思つて作つたものです。ほん
 うにげんげを摘みに來て、野に寝る人がありませうか。狐にでもつまゝれなければ、さう
 いふことをするはずがありません。かういふのがよいと考へるのは、實際の生活から
 離れたところに、文學があるのだとする考へで、もう今の人は關係のない、優美と
 いふ趣味であります。だからこの歌は、全然嘘の歌だといはねばなりません。かうした
 嘘を重ね／＼して來た日本の歌が、だん／＼悪くなつて來るのは、もちろんのことであ
 ります。で先にいつた平安朝の古今集の一番お手本になつたのは、赤人のかう
 いふふうのもので、そのために歌は、次第に空想的になり、實際を離れ、それととも
 に悪くなつて來ました。文學といふものは、われ／＼の實際の生活から離れたもの

が、よいのではありません。

萬葉集には、まだく上手な人が、たくさんにゐます。だが日本の歌の歴史は、とても私のために與へられた紙數では書き盡すことは出来ないのです、このへんで切り上げて、つぎの時代に移ります。

一二、古今集頃の歌

つぎに名高い歌の書物は、萬葉集が書物になつて後、百年以上経つてから出た、古今集といふ歌集であります。これは御存じの醍醐天皇の御代に出来たもので、普通、天子の仰せでつくつた歌集の第一番のものだといふことになつてゐます。かうした歌集を敕撰集といひます。敕撰集の第一のものであるために、古今集の歌が、それ以後の歌の動かすべからざる手本となつてしまひました。

この古今集を見ると、不思議なことには、古今集の出来た當時に生きてゐた人の歌は、たいていよくなくて、死んで久しくなつて、名さへ傳はらない人の歌、或は宮中でお祭りに傳へられてゐた歌などが、とびぬけて勝れてゐます。それは一たいどういふ

わけでせうか。つまり古今集の時分には、歌はかういふものだと小さな標準をきめてかゝつて、それにあてはまるものを集めたから、規模の小さい、方向を誤つたものが多く出たわけであります。

古今集を撰んだ人は四人あるが、そのうちもつとも名高いのは、あの紀貫之といふ人であります。この人は、さういふ歌を詠むことが上手だつたけれども、本式の文學らしいものを作ることには、ほとんど出来ませんでした。さうして見ると、やはり下手といふより爲方ありません。

一、近江より朝たち來れば、うねの野にたづぞ鳴くなる。明けぬ。この夜は
 二、まがねふく吉備の中山。おびにせる、細谷川の音のさやけさ
 三、みさぶらひ。み笠と申せ。宮城野の木の下露は、雨にまされり
 (一) 朝(只今の朝の意味とは少し違つてゐます。まだ夜のあけない時分をいふのです) 立つて、近江の國をばやつて來ると、このうねの野に、鶴が鳴いてゐることだ。あゝ明けた。この夜は。

いかに、暗い夜の朝に代つた喜びが、『あけぬこの夜は』といふ簡單な句のうちに、漲つてゐるではありませんか。そして暗がりから明るくなつて來て、今まで歩いてゐた道

のほとりに、鶴の寝泊りしてゐた沼地のよ様なものゝあつたことに、氣のついた様子が、明らかに感ぜられます。ほとんど、なんのやかましい思想も強い感情もないが、明るい、にこにこした氣持ちが、われ／＼を心の底からゆすり立てるように感じないでせうか。

(二) まがねふくは、枕詞。

吉備の國の中山——美作にある——よ。それが腰のひきまはしにしてゐる、細谷川の音の澄んで聞えることよ。

あなた方は、この歌を見ると、内容がからつぽだと感じるかも知れません。しかしさういふふうには早合點してしまふようでは、日本の歌はわかりません。日本の歌には意味や思想から離れて、また特別のねうちを持つたものさへあるのです。そしてその代表的なものがこの歌です。まづ第一に、調子の高いことを感じるでせう。のびやかで、ひっぱり上げるような調子が、ある點まで行つて、ぴったりと落ちつきよく納まつてゐるではありませんか。

かういつても、あなた方が考へて見てくれなければわからないことだが、幾度もくり返して貰ひたく思ひます。意味からいへば、川の音がよいといふだけのことで。そして吉備の中山が帯にしてゐるといふようなことは、別に珍しくもなんともないのであるにも

拘らず、われくはそれに對して、朗らかな氣持ちを受けずにゐられません。この歌は、
萬葉集にも似たものがあつて、

おほぎみの御笠の山の帯にせる、細谷川の音のさやけさ

となつてゐます。だが私は、前の方が好いとおもひます。なぜなれば、『おほぎみの御笠の山』といふところに、人の頭が、もつれを感じます。純粋に單純にすつきりとはひつて來ないのです。

まがねふくは、鐵を吹きわけるといふ元の意味を忘れてゐて、こゝでは、單に吉備を起すための枕詞にすぎません。こんな單純なうちに、われくの心を豊にする文の味ひが歌にはあるのです。かういふ味ひは、祖先以來與へられてゐる大事なものだから、それを失はないようにするのが、われくの務めといふよりも、われくの喜びと感ぜなくてはなりません。

三番めになると大ぶん複雑で、

(三) お附きの人よ。お笠であると申し上げい。この宮城野の木の上からふり落ちる露は雨以上である。

これは、自分の大事に思つてゐる人に對する篤い心の現れで、何もわざぐお附きの人

を呼んでいつてゐるのではなく、かりにさうしたありさまを、胸に浮べたゞけです。獵に出かけた人が、露に濡れてお出でになるだらう。お附きの人が、お笠をさし上げてくれ、ばよいのにと感じてゐるのを、直接にいひかけたように、詠んだのであります。

この歌になると、あなた方にもおもしろみはわかりませう。だがなほこの歌について、注意せねばならぬのは、みさぶらひのみ、みかさのみ、みやぎのゝみが重なつてゐる点であります。もつといふと、みの音と關係の深いま行音の、まをせ、まされるのまがあります。これを頭韻といつて、日本の歌では、豫め計畫してかういふことをするのほ、偶然こんな形の出来ることがあります。この歌の快い調子も、似た音の重なつてゐるところから來てゐるのであります。けれどもこれは、始終くり返される、あきくするものだといふことを考へなければなりません。

その外に、まう二三首、古今集から勝れた歌やら、變つた歌を附け加へておきませう。

一三、在原業平

へいあんちよう
 平安朝のたくさんの歌人のうち、ことに名高く、また實際ねうちもあつた人の一
 たり、在原業平といふ人でありませう。この人の歌は、大人でなければわからない氣持
 ちをあまり詠みすぎてゐるので、今度は説明をすることは出来ないが、一例をあげる
 と、自分の親しくつきあつてゐた人が、行くことも出来ぬところに隠れてしまつて後、そ
 の人のゐた家を訪問して一人悲しんだ名高い歌があります。

月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。わが身ひとつは、もとの身にして

ちよつと見たゞけでは、わかつたようであらぬ歌です。同じような句が重なつてゐる
 と、自然片一方の方は、一部分略する習慣があります。この一句、二句は、『月
 や昔の月にあらぬ。春や昔の春ならぬ』といふのがほんとうなのです。歌でなく普通の文
 章なら、さう書かねばとほりませぬ。それをかういふふうにして、意味を表す間に、
 外れ易い氣分を保存しようとするのが、歌の上の工夫であります。工夫でなくとも、自然
 にその作者の心が燃え立つてゐると、かういふふうにつごうのよい氣分風な現し方が、
 口をついて出て來るのであります。

春は昔の春ではないか。月は昔の月ではないか。月も春も、昔のまゝのものである。
 自然物はさうして變らないでゐるに拘らず、自分の身だけは元のまゝにして、さう

して……

と後は誰にも感ぜられることだから、いひ盡さなかつたのです。これはわざといひ盡さなかつたといふより、いひ盡したゞけでは満足出来なかつたので、かういふ尻切れとんぼのようになつてゐるのですが、かへつて讀む人の心に、深い印象と聯想とを起させるものなのです。つまりこの後へ來る言葉を補へば、私の知りあひの人は元の身ではないといふ言葉にすぎません。さうした言葉を入れるのと讀む人の氣持ちに任せるのと、どちらが好いと思ひますか。

私はこの歌が譬へば百點の歌だといふ程には、讚める氣にはなりません。が、尠くとも、平安朝の短歌のうちでは勝れたものであるといふことだけはいひたいとおもひます。いかにもねばり強い、あきらめにくい悲しみの心が、ものゝ纏ひついたように、くねくねした調子の現れてゐるのが感じられませう。かういふ歌が、この後また一つのお手本となつて來るのであります。しかしながら、完全にこの手本をまねをうせ或はのり越したといふものは、さうありませんでした。

ついでに、秋の歌のうちから、二首ぬいておきませう。

一四、作者のわからぬ歌に、よい物のあること

蝸の鳴きつるなべに、日は暮れぬ。とおもふは、山のかげにぞありける

木のまより漏り来る月の かげ見れば、心づくしの秋は 來にけり

これは二首ながら、よみ人知らずといつて、作つた人のわからない歌となつてゐます。ところが、先にもいつたとほり、古今集のよみ人知らずの歌のうち、勝れたものが多いので、これなどはどこへ出しても恥づかしくない立派な歌であります。

蝸が鳴いたと共に、日は暮れてしまつた、と自分がふつとさう考へたのは、山のかげが、家の方へさして來て、うす暗くなつたためだつたのだ。

かういふ歌になると、先の話の調子でいふと、或は趣向をもつていつた歌だとおもふ方があるかも知れません。「日はくれぬとおもふは」などいふところがよくのみこめなければ、さういふふうな感じがしそうです。けれどもこの作者の中心として詠んでゐるのは、そんなところではなく、何事もないごく退くつな生活をしてゐる人が、けふもまた暮れて、蝸が鳴いてゐるとかう思つてゐて、暫く経つて後よく見ると、それはほんとに、日が暮れたのでなかつたといふことを、説明でいつてゐるのでなく、氣持ち

から讀む人の心に觸れて行つてゐるのであります。

あなた方がこの歌から受ける感じは、確かにさうした方面が主なのだとかへて貰はねばなりません。とおもふはなごいふ調子は、いかにも日を暮しかねてゐる退くつな人のあくびでもしたいような氣持ちが出てゐるとおもひます。

今の人は、秋だつて春だつて、さう變つた心持ちを持ちません。それがほんとうはよろしいので、あなた方が特別に、秋は悲しいものだといふふうに感じてゐてはいけません。しかしながら昔の歌人は、秋は悲しいものだと感じることの出来るのは、自分の歌人としての大事の資格だとおもつてゐました。秋のさびしさ悲しさのわからぬものは、文學者でないと恥ぢてゐたのです。それはかういふ歌がいくつも積み重なつた結果、秋は悲しいものだといふ約束が出来てしまつたのです。だがさういふ不自由な約束の出來ない前の歌を見ると、譬ひ秋の悲しくさびしいものだと言んでゐても、それが各個人の實際の感じとして人々の胸に強く觸れるのであります。強制せられて爲方なしやつてゐるのと、自ら進んでやつてゐるのと違ふわけであります。

いつも、秋になるといふと、心をめちやくちやにする、その秋はまたやつて來たとおもふ。木立ちの間から、漏れてさして來る月の光が、色が變つて感じられる。それを

見ると、あゝまた寂しい秋だ、とかうおもふといふ歌です。

あなた方の若い心には、かういふ歌の興味はわからないかも知れませんが、日本の文學には、かういつた静かなかな味ひが、よい作物にはずっととほつてゐます。それを物を單純に考へる人は、悲觀的だ涙脆い氣持ちだといつて、いけないものとしてゐるが、人間はいつもにこく笑つてゐるものばかりのものではありません。さびしく或は悲しい氣持ちになつた時に、はじめてほんとうの自分といふものを考へて見るものです。だからかういふ歌も、強ちに排斥することは出来ません。もちろんかういふ歌をまねたものが多いからといつて、日本の文學は悲觀的な文學だなど、よくも道理を知らないで、一概にばかにしてかゝるのはいけない癖だとおもひます。外國の譬へにも、金持ちが天國へ行くのは、大きな象に針の穴をとほらせるよりもむつきしいといつてゐますが、さういつた満足しきつた氣持ちばかりでは、人間にはしみ／＼と、自分を省みる時が來ないのであります。

一五、歌の見方

いまひと
今一つ、古今集の名高い歌をあげて、評判と實際とはこれ程違ふといふことを證明して見たいとおもひます。

勅撰集第一番の古今集の春のはじめにあるものといへば、そのうちでも第一番の歌といふことになるから、自然人は、それを重く見ます。在原元方といふ人の歌で、『舊年に春立ちける日よめる』といふ題で、

年のうちに、春は來にけり。一年を、こそとやいはむ。今年とやいはむ

この歌、偶然よいものゝように考へられてゐます。ところが明治になつて、古い歴史のある日本の短歌を改正して、新派和歌といふものを唱へ出した一人の正岡子規といふ人は第一にこの歌を笑ひました。こんな歌がよいのならば、またかういふふうに詠んでも歌だといふことが出来るといつて、

日本人と、西洋人とのおひの子を、日本人とやいはむ。西洋人とやいはむといふのでした。

これは子規が、説明のわかり易いように作つて見たゞけで、固より譬へにすぎません。子規のは三十一字のたゞの文章で、歌ではありません。いくらまづくともつまらなくとも、『年のうちに』の方には、多少意味以外に安らかな、そして子どもらしい氣

持ちになつて起した気分が出てゐます。その點はもちろん考へねばなりません、さうかといつて、この歌がよい歌だとおもふのは、たいへんいけないことです。

ふる年といふのは、新年に對する舊年であつて、昔の暦では年の明けないうちに、立春の節といふ暦の上の時期がやつて來ることもあつたのです。普通の考へでは、春と正月とが一致するものとしてあります。これは、習慣から出て來る心持ちであります。ところが時とすると、暦の上にさういつた行き違ひが出來て來ます。年の變らぬうちに春が來たといふ氣持ちは、文學的ではないけれども、確かに文學の生活の上では、一種注意をひくことであります。それでこの歌が出來たのであります。

まだ、年の變らない舊年の間に、あゝ春がやつて來たことだ。して見ると、この一年が二つに分れて、きのふまでを去年といはうか。今日から後を、今年といはうか。

それも理くつからはをかしいが、考へればなんでもないとところに、わづかな興味を起したにすぎません。だからけつしてよい歌ではありませんが、子規のいふような、あひの子の歌見たよなものでありません。しかしながら、かういふ歌が後々、だん／＼は

やつてきて、數へきれないほどたくさん、同種類のものが出來ました。つまり一種とぼけた歌といはなければなりません。

一六、西行法師と新古今集

古今集の後、たくさん勅撰集やらいろんな歌人のめい／＼の家集といふものが出てゐるが、歌のほんとうの性質といふものは、だいたい、古今集の読み人知らずの歌すなはち先に解釋したようなものにあるといふふうに考へ出されました。

古今集の歌は、全體としてはいけなない歌がありますが、短歌はどんなものかと考へると、古今集の歌がまづ頭に浮ぶのであります。その後二百年あまりの間に、だん／＼歌といふものゝ、かういふものでなければならぬといふ、漠然とした氣分が出來て來ました。さうして皆さんも知つてゐる鎌倉時代に近くなると、京都の貴族たちの歌が、目に立つて變つて來ました。それは、新古今集といふ歌集を見ればよくわかることです。

後鳥羽上皇は、非常に御熱心でもあり、ごく稀なほどの名人でもいらつしやい

ました。いはゆる目の寄るところに玉で、この新古今集の時ほど、日本の歌の歴史の上で、名人・上手といふべき人が、たくさん揃つて出たことはありません。唯皆あまり仲間づきあひが盛んに行はれたゝめに、歌は、お互ひによい影響ばかりでなく、わるい流行を起すことになりました。文學の上によい人がたくさん出たから、かならずしもよい文學が出来るといふわけのものではないといふ事實を、この時ほど、はっきりと見せたことはありません。つまり上手どうしが、皆肝腎の點よりもごく枝葉にわたるところに苦勞をして、それをお互ひに誇りあつたゝめに、それが重なり／＼して、いけないことが起つて來ました。それでも中には、よいものがずいぶん出來てゐます。なんといつてもすぐれた人の作つた文學にはよいものが出ないではゐないわけなのです。

樽咲く外面の木かけ 露おちて、さみだれ霽るゝ風わたるなり（前大納言忠良）

樽は、普通『せんだん』といつてゐる木で、紫がゝつた花が夏頃に咲きます。それが家の外側の木立ちの中に、交つてゐるわけであります。それを作者がさみだれの頃に見てゐる歌で、

樽の咲いてゐる家の外側の木立ちの下蔭に、ぼたくと露が落ちる程に、風が吹きとほる。それは、幾日か降り續いてをつた梅雨が上る風である、といふ意味です。

かういつたところで、味ひは、あなた方がめいゝに、幾度もくり返し讀んで見なければ起つて來ないとおもひます。

この頃の先輩に、名高い西行法師といふ人があります。御存じのとほり、世捨て人として一風變つた、靜かな、さびしい歌を作つたといはれてゐます。そしてこの人の歌が、新古今集の歌の風に、非常な影響を與へたとも見られてゐます。だがこの人の歌全體に、かならずしも世間でいふようなものばかりでなく、やはり當時流行の、はでなこせくしたものもありません。だがこの人のものでいゝのにならうと、かういふものがあります。

吉野山。櫻の枝に雪散りて、花おそげなる年にもあるかな

雲かゝるとほやまばたの、秋されば、おもひやるだにかなしきものを

吉野山は、古くからずいぶん長く、坊さんその外修道者といつて佛教の修行をする人が籠つてゐたことは、明らかな事實でした。その經驗から、はじめの歌が出來たのであります。

吉野山よ。その吉野山の櫻の木の枝に、見てゐると、雪がちらく降るかゝつてゐて、これでは、花がいつ咲きさうにも思はれない。今年、花の咲くことの晩くお

もはれる年よ、といふのです。

さびしい修道者の仲間の黓い山家の暮しのうちにも、何か待ち設ける心があつて、たのしみになつてゐるものです。もう春になつてゐながら、せめて樂しみにしてゐるその花さへも、とても咲きそうに見えない。さういふ靜かな人の物足りない心持ちを、さびしいとも悲しいともいはないで、それかといつて、雪のふりかゝつてゐるのを怨むでもなく、自然の景色をそのまゝに眺めてゐる氣持ちがよく出てゐます。わりあひいゝ歌の多い西行にも、これほどの歌は、さうたくさんにはありません。後の方は、これに比べるとくらか露骨に、西行の氣持ちを出しすぎてゐるが、こゝまでつつこんで歌つた人がないものですから、一例としてあげました。

雲かゝる遠山はたといふのは、雲のかゝつてゐる景色が、見えてゐるのではありま
すまい。恐らく西行の知つた人が、西行と同じように、遠山にかすかな修
道の生活をしてゐる。それが、秋になつて來た時分に思ひ出される。その遠山
ばた——このはたは、山の傍といふことでなく、やはり、山の畠でせう——その秋の
雲が、絶えずかゝつてゐるはずの、遠い山家の畠のあるところが、秋が來るといふと、
たゞ想像して考へて見るだけでも、その生活が悲しく、胸に感じられる。まして、

このさびしい秋を、山畠のあたりに住んでゐる人は、どんなに悲しからうといったものらしいのです。

この歌の特徴は、想像してゐる景色が、實際にあり／＼と目に浮んで来るようになつてゐるところにあります。これを文學の上で把持力といつて、自分の經驗をいづまでも忘れずに、握りしめる力があつて、機會があると、それを文章に現す能力をいふのであります。一句・二句の景色は、西行にその強い力のあることが窺はれます。それによつて、その以下の思ひやるだに悲しきものをといふような、むしろありふれた言葉まで、いき／＼と人の胸に、なんだか堪らないように迫つて來るのであります。

一七、ほんとうに優美な歌

おなじ新古今集に、藤原良經といふ人があつて、攝政太政大臣にまでなつた人ですが、よほどの歌よみでありました。

うちしめり、あやめぞかをる。ほとゝぎす鳴くやさつきの雨の夕ぐれ

この歌などは、そんなにたくさん類例のないほどよいものであります。ものゝ感じ方

が非常に鋭敏で、鼻・耳・肌などに觸れるものを鋭く受け取ることの出來た珍しい文
學者であつたことを見せてゐます。

五月の雨の降つてゐる夕ぐれのことです。どこからともなく、あやめの咲いた花のか
をりがして來ます。それが、かをりがするといふ程でなく、なんとなく感じられると
いふ程度に匂つて來るのです。それを雨のために、匂ひが和らげられて、ほとんど、
あるかないかのように、しんみりとしたふうに香つて來る、と述べてゐます。

説明したゞけではなんでもないことですが、この時代に、これほど細かく捉へがたい
ことを現した人はないのです。

『ほとゝぎす鳴くやさつき』といふのは、何もその時ほとゝぎすが鳴いてゐるのではあり
ません。さつきといふために、習慣的にほとゝぎすが鳴くところのといふ言葉が附
て來たのであります。いはゞ一種の枕詞で、かういふ風に靜かな歌では、少しでも
いひすぎたり内容が殖えすぎると、全體の調和が破れて來ます。むしろ、内容の
ないものを入れなければならぬのです。それでかういふ言葉が利用せられてゐるのです。
けれどもどうしてもほとゝぎす鳴くやといふと、ほとゝぎすが鳴いてゐる實際の様子が
浮びます。これがこの歌の少しの瑕であります。

この歌を作りかへて、別に變つた領分を開いたものがあります。それは明治になつて死んだ京都の蓮月といふ尼の作で、

朝風あさかぜにうばらかをりて、ほとゝぎす鳴くや うづきの志賀しがの山越やまごえ

これになると、ほとゝぎすは、實際じつさいに鳴いてゐるようによに詠んでゐます。けつして枕詞まくらごでなく、四月しがつを意味するうづきの、自然しぜんの景色けしきの一部いちぶとしてゐます。が、こゝを中心しんとして見ると、どうしても良經よしつねの歌から、暗示あんじを得て作つたに違ひありません。そして良經よしつねの歌の氣分きぶんをすっかり取つて、一種いっしゆの歌に纏めてゐます。更に今少し、さつぱりとした感じかんじが出てゐるようです。

四月頃しがつころには、野茨のばらの花はなが咲くものです。この匂におひがまた非常ひじょうによろしい。風かぜなどにつれて匂におつて來ると、なんだか新鮮しんせんな氣きのするものです。志賀しがの山越やまごえといふのは、昔むかしから歌うたにたびく詠よまれた、京都きょうとから近江あふみへ越こえるところです。

この歌は恐らく空想くうそうでせうが、この場所ばしょ或はさうした景色けしきは、蓮月れんげつが始終しじゆう見てゐたに違ひありません。だから空想くうそうであつても事實じじつと同じであり、むしろ事實じじつより力ちからづ強く人の心こゝろに響ひびくのです。野茨のばらの匂におひがして來て、自分じぶんの行く道みちの傍そばに、ほとゝぎすの鳴く聲なこゑのするところの志賀しがの山越やまごえよ、といふのです。かういふ風ふうな作りかへが、また短た

歌うたの上うへにたびたび行おこなはれました。けれども、わぎく作りかへようといふ考かんがへを持つた時ときには、たいてい失しつぱい敗ばいして、元もとの歌うたから獨どくりつ立たしたねうちのない、文ぶん學がく的てきにはだめなものが多おほいのであります。蓮れんげつに月げつに尼にの歌うたなどは、作つくる時ときには恐おそらくうちしめりの歌うたのあることも忘わすれてゐながら、どこかに記きおく憶のこが残のこつてゐて、その調ちようし子し、その氣きぶん分ぶんが、現あらはれて來きたものでありませう。

一八、調ちようし子しの立たつた歌うた

後ご鳥と羽は上しよう皇こうのお歌うたは、その現あらはし方かたが非ひ常じように手てがこんであて、ちようど腕うでのよく利きいた人の作つくつた、工こう藝げい品ひんを見みるようでありますから、あなた方がたに、そのおもしろみを感じかんて貰もらふのは、むつかしいと思おもひます。こゝにはごく平へい凡ぼんなものをあげておきませう。

秋あきふけぬ。鳴なけや。霜しも夜よのきり／＼す やゝかげさむし。蓬よもぎ原がはらの月つき

秋あきが深ふかくなつてしまつた。この霜しも空ぞらの晚ばんに鳴ないてゐる、聲こゑかれ／＼のきり／＼すよ。もつと出で來きるだけ鳴なけ。空そらから照てらす光ひかりも、冷つめた感かんじられる。その蓬よもぎ原がはらのようになつた家いへを照てらす月つきよ。その下したで、きり／＼すが、ほのかに鳴ないてゐる。

きり／＼すといふのは、こほろぎだといつてゐます。

かういふ風にくろうとらしい歌をお作りになつたので、歴代の皇族方の中では、文學の才能から申して、第一流にお据りになる方です。けれども、時代が先に申したようですから、そのお作も、自然おもしろさが片よつてゐて、完全なものとは申し上げることが出来ません。

天皇さまをはじめ、皇族方のうちで、圓滿な歌を作られたお方を探して見ると、それから時代が下つて、南北朝のはじめ頃の伏見天皇、それからその皇、后さまの永福門院といふお方、このお一方が、まづとびぬけていらつしやると思ひます。勅撰集でいふと、新古今集が八番めの歌集、それから後六つめすなはち、古今集から勘定して十四番めの玉葉和歌集、十七番めの風雅和歌集、この二つものものに、特別に關係がお深いのであります。

一九、發達しきつた歌

ゆふぐれの雲飛びみだれ、荒れて吹く嵐のうちに、時雨をぞきく

いつはとも 心に時はわかなくに、をちの柳の 春になる色

これが伏見天皇のお歌です。後鳥羽上皇から、も一つ進んで、更にその一種の癖を抜いた素直なお歌になつてゐます。

夕方の空には、一ぱい雲が亂れてゐて、あちらこちらに早く飛び廻つてゐる時に吹きおろす山風が、あら／＼しく吹いてゐる。その目にも耳にも、すさまじい景色。殊にはげしい風の音にも打ち消されずに、静かな時雨の音のしてゐるのを自分が聞いてゐる。

これはちよつと見ると、「雲飛び亂れ」、「荒れて吹く」などいふ言葉が、ごたく／＼してゐるようであるが、私の解説したように荒れて吹くから、別に考へて見ると、空模様ように更に加へて、はげしい風の様子ようすが感じられます。このお歌は静かな時雨の音を、さうした間に耳を留めてゐたといふところに、變つた興味きょうみを起されたので、かういふ詠み方の歌は、これ以前にもこれ以後にも、まづ類例のない新しい、さうしていゝものだといふことが出来ます。あらしといふのは山おろしのことで、暴風ぼうふうではありません。今は、冬か春か心の上で迷はずにゐられない時分である。心ではいつとも時候じこうの區別くべつがつかないのに、目に見るものは、すでに尠くとも、一つだけは春らしいしるしを示

してゐる。これは遠方に立つてゐる柳の木、いかにも春景色になつて行く色あひがそれである。

春になる色といふのは、まだ春になり切つてゐるわけではありません。春の様子が調つて行つてゐることをいふのです。

色といはれたのは、漠然とどこか春らしい様子・色あひの見えることを、気分式に示されたのです。をちの柳といふのも、はつきりと、何本あるとも、どの位の距離にあるともいはれないで、まづほのかな色あひで、幾本か竝んでゐるといふ感じを起させるためなのです。いつはといふのは、いつといふのとかはりがないと見ておいてよろしい。

やまもとの鳥の聲より明け初めて、花もむら／＼色ぞ見え行く

何となき草の花咲く野の春。雲にひばりの聲ものどけき

これが永福門院のお歌です。御覽のとほり、物の色あひ、組み合わせが、非常に美しく作られてゐます。

山の麓の方に、鳥の聲がする。その鳥の聲のするあたりから、だん／＼夜が明けかけて、あちらに／＼かたまり、こちらに／＼かたまりといふふうに、山の櫻の花も色が現れて、だん／＼明らかになつて行く。

『花もむらく色ぞ見え行く』などいふところに氣のついたのは、やはり時代がずつと新しくなり、人の心が自然物に對して、敏感に動くようになつて來たからです。しかし普通の人は、文學の上ではやはり昔のまゝの型とほりに作つてゐるに拘らず、勝れた人は、その時代の人らしい眼で、物を見、感じるものであります。さうして新しいとはいひながら、柔らかなで穩やかなよい氣持ちを破らないで、上品さを持ちながら歌はれてゐるのが、この歌などのよいところです。殊に二番めの歌などになると、ほとんど、只今の人が作つたものか、とうっかり思はれるようなお作であります。まづ普通の人ならば、名のない雑草の花などは詠みません。ところがこの門院様は、その雑草の花に興味を持つてゐられます。なんといふことのない變つた點もない草の花、この咲いてゐる野の春景色、とぱつと廣い様子を現して來て、下の句で、自分はどこにを、何をしつてゐるかといふことを、はつきりと現してあります。その草の花の咲いてゐるところに据りこんで空を仰ぐと、雲が出てゐる。その雲のあたりへ鳴き上つて行く雲雀の聲に氣がついて、そして、今かうしてゐることの外に、なんの爲事も煩はしきも心がかかりもない、豊かな氣持ちを感じてゐることを、のどけきといふ言葉で示されてゐます。

この頃にも、このお二方を取りまいて、名人といつてよい人々が大ぶんゐるの

ですが、そのお話は、只今いたしません。こんな勝れた歌が、しかも非常に貴い方々のお作に出て來てゐるに拘らず、世間の流行は、爲方のないもので、だんく、悪い方へくと傾きました。さうして、この玉葉集、風雅集などの歌は、いけないつまらない歌だ、とねうちをきめてしまふようになりました。これは世間の評判と、ほんとうの物のねうちとは、たいていの場合一致してゐないそのもつとも適當な例であります。これから後、室町時代から時が過ぎて江戸の時代に至るまで、そんなに勝れた歌人は、多くは出てまゐりませんでした。つまり平凡なお手本を敷き寫しになぞつて行くものですから、だんくつまらなく、その作者の特徴を出すことが出來なくなつたわけであります。

二〇、江戸時代の歌

ところが江戸時代になると、徳川氏の政治の方針がさうであり、また世の中が治つて來たゝめか、學問が盛んになつて來ました。そして支那の學問から更に進んで、日本つほんの學問がくもん日本にの文學ぶんがくの研究けんきゆうが行おこなはれ出して來ました。さうして學者がくしやも文ぶん

學者も、かならずしも上流社會の人々ばかりでなく、かへつて低い位置の人の方に中心が移つて來るようになりました。

昔の文學昔の短歌を研究した結果、今までやつてゐたのはいけなかつた。五百年も千年も前の歌の方が、自分たちのものより遙かに新しく、もつとく熱情が籠つてゐるといふことに、皆が心づくようになりました。さういふよい影響を與へたのは、第一に、萬葉集が新しく讀み返されたことであります。それから學者・文學者の間に、一足飛びに、よい歌に激戟せられて、新しい歌を作る人々が殖えて來ました。

さういふ人たちは、數へ上げることの出來ない程たくさんありますから、こゝにはごくわづかの代表者だけを出しておきませう。

二一、歌人としての國學者たち

よくいふ國學の四大人のうちで、一番文學者らしかつたのは賀茂眞淵であります。そしてそれ以前にも、だんく萬葉ぶりの歌を作つた人があるが、この人から一つの

主義しゆぎとして、さういふ方面ほうめんに進む歌うたが出来できて來きました。でもこの人の歌うたは、評判ひやうばんほども勝すぐれたものではありません。だから一首いっしゆだけ引ひいて置おきませう。

秋あきの夜よの ほがら〜と、天あまの原はら照らる月つきかげに、雁かり鳴なき渡わたる

ほがら〜といふと、夜明よあけの空そらのあかるさを示しめす言葉ことばです。それを、月つきの照てつてゐる空そらの形けい容ように用もちひたので、いかにも晝ひるのような明あかるい天てんが感かんじられます。隅すみから隅すみまでからりと明あかるく、廣ひろい空そらに照てつてゐる秋あきの夜よの光こう線せんのさしてゐる中うちに、雁かりが鳴なき渡わたつて行ゆくといふ歌うたです。

感かんじてゐるところはよろしいが、上うへの三句さんくがごたく〜として、感かんじた氣分きぶんがすつきりと現あらはれてゐません。けれどもこの人ひとは、まづ大體だいたいかういふ調子ちようしに、一筋ひとすぢに歌うたふのが得意と意くいだつたと見みえます。

おなじような歌うたを並ならべて見みませう。上田うへだ秋成あきなりといふ人ひとは、眞淵まぶちの孫弟子まごでしに當あたる文學ぶんがく者しゃですが、この人ひとも、歌うたはその散文さんぶんほど上手じようずではありませんが、かなり作つくれた人ひとであります。

照てる月つきに、雁かりのまればと鳴なき渡わたる。わが待まつ友ともは、こよひ來こなくに
こんな歌うたになると、この人ひとの方が、遙はるかに勝すぐれた才さい能のうを持もつてゐたことがわかります。

空そらに照てつてゐる秋あきの夜よの月つき。その月つき光かげのさしてゐる空そらを遠えん方ほうからやつて來きた雁かりが、列れつをなして鳴なきとほつて行く。こんな晩ばんには、一いつしよに親したしむ友ともだちの訪ほう問もんが待またれる。けれども私わたしの待まつてゐる仲なか間まは、今こん晩ばんはやつて來こないでゐるのに、さうして私わたし一人ひとりで明あかるくほがらかな天てん地ちに照てる月つきに對たいしてゐるのに、その上うへを雁かりが鳴なき連つれてとほる、といった満まん足ぞくはしてゐながら、ある點てんに、自じ分ぶんの感かんじをいつて聞きかせたい仲なか間まのゐない、もの足たらなさを述のべてゐるのです。

しかしそれも、けつして理りくつらしくは出でてをらずに、このほがらかな調ちよう子しに、玉たまのように包つまれて、たゞ月つきの光ひかりに、及および雁かりの列れつに動うごかされた氣き分ぶんとして、胸むねに觸ふれて來きます。かういふのが、ほがらかな、たけ高い調ちよう子しといふのであります。先さきの歌うたに比くらべて見みると、こんな形かたちの歌うたの出でるまでは、それでも相そう當とうに見みえたものが、なんだかつまらなく感かんじられるでせう。

まれびとといふのは、お客きやくさまといふことですが、ごくたまに來くる珍めづらしい人ひとといふのが古ふるい意味いみです。渡わたり鳥どりなる雁かりをば、この珍ちん客きやくに見み立てたのであります。それを譬たとへのようにいはないで、直ちよく接せつにまれびとなる雁かりといふふう^にいつたところに、濁にごりがなくなつてをります。

二二、加納諸平

眞淵の弟子の本居宣長、その弟子の夏目蘊磨、この人の子で、紀州の醫者の家の養子となつた加納諸平といふ人があります。小さな時から父の伴をして、諸國を歩いて攝津の國へ來た時に、酒飲みの父親は、月を捕へるのだといつて、歌の友だちなどが止めるのもきかずに、池の中へをどり込んで死にました。それからすぐに和歌山へ引き取られて行つて、久しく國へ歸ることもありませんでした。加納家に住みこんでから、はじめて遠江の母のところへ歸省したことがあります。かういふ傳記の一部を知つて諸平の歌を讀むと、誠に思ひ深いところが感じられます。

歌や俳句の上では、その形が短く小さいだけに、はしがき——また、詞書きともいふ——や、その歌を作つた事情などを知るといふことが、外の文學とは別で大事なことであります。つまりその作物の背景になつてあるものをのみこんで、眞に歌なり俳句なりを味ひ知るといふことが、どうしても必要なのです。

旅衣わゝくばかりに 春たけて、うばらが花ぞ、香に匂ふなる

青年せいねんが一人旅ひとりたびをしてゐるといふことを、頭あたまに持つて下ください。わゝくといふのは、きれや着物きもののぼやゝゝになつて來くること、長旅ながたびをしたゝめに、摺すり切きれて來きたりしたところがある様子ようすです。

着きてゐる旅行りょこうの着物きものが、わゝけるほどに早はやく出でた春はるの旅たびも、すでに春はる深ふかくなつて、道傍みちばたに雜草ざつそうのように咲さいてゐる野茨のばらの花はなが、匂におひ立たつて感かんぜられる、といふ意味いみです。

がそれはもちろん、實際じつさい以上いじょうに歌うたらしい味あじをつけようとしてゐます。理りくつつぽくいへば、和歌山わかやまを出でて遠とほた江ふみまでの間あひだに、旅たびごろもがわゝけるといふ程ほどのこともあるまいし、また早そう春しゆんに出でたのが晚ばん春しゆんになつたといふ程ほどのこともありません。けれどもそれほどのは、文學ぶんがく上じょうの一種いっしゆの誇こちよう張ちやうといふもので、いくらか輪わをかけて感かんじ深ふかくいひ表あらはすのが、文學ぶんがくのほんとうの爲しかただと、今いまですらも考かんがへてゐる學者がくしや・文學ぶんがく者しやが多いのですから、これくらゐのことは、昔むかしの歌うたとしてあたりまへだと見ていゝとおもひます。この頃ころの人はすべて、あまり自分じぶんの生活せいかつが歌うたに現あらはれるといふことを嫌きらつたので、さういふふうなのを無風流ぶふうりゆうだとしりぞけてゐました。この中うちにこんなのが出でて來くると、さすがにちよつと、胸むねをうたれる氣きがするのです。

ゆふ月夜 ほんの見え初めしあぢさゐの、花も まどかに咲きみちにけり

これはちよつと見ると、いかにも紫陽花の花の様子を細やかに寫してあるように見えませんが、實は紫陽花を見て作つたのでなく、見慣れてゐる花の模様を空想に浮べて、美しく爲立てたに過ぎません。だから近頃の歌や文學の上からは、かういふ態度はよいとはいへないが、それにしても作つたものが相當によければ、やはりよいといふより外はありません。空想で作りながらこれまでに作り上げたのだから、その作者に力の十分あつたことがわかります。この人は學者であり文學者ですから、言葉のあやを十分に心得て、少しのむだもしないでゐます。それがかへつて、今では邪魔になるのです。譬へばわれゝの時代には、夕づく夜ならば、ほんとうに夕方のお月さまが出てゐると感じるだけで満足するのに、この人の歌では、昔の習慣に従つて、ほの見え初めしの枕詞なる夕づく夜といふ言葉を、まづ据ゑたのです。もちろんたゞの枕詞だけでなく、夕月の頃にほんのり見えかけたといふ意味にはいつてゐるのですが、學問的にもこの二つの句の連絡をつけてゐるわけなのです。昔はかういふことの自由に出來るのが名人だと思はれたのですが、今ではかへつて、文學を味ふ上の足手纏ひとして、避けねばならぬことであります。夕月夜といふのは夕月の夜といふことで

なく、月夜は月のことです。で、夕月の頃といふと、新月の出た時分といふことになりません。

その頃にはまだ、ほんのり見えかけてゐた紫陽花のその花も、もう今では、まどかにまんなまるく、圓満に咲いてゐることだ。

紫陽花の花のだん／＼咲き調つて行くありさまが、よく詠んであります。その上に、いかにも紫陽花に適した気分が出てゐます。たゞそれだけで満足せずに、新月の頃から注意してゐたのが、こんなに大きく立派に咲いたといふようなおもしろみを附けたのは、ほんとうはよくないのです。けれどもそれはあなた方の年頃では、細かに説いてもむりですから、もつと長く歌に親しんで貰つて、自分自身の批評が出来るまでは、まづよい歌だと考へて置いて下さい。その上この歌では、まだ／＼言葉の外にいひ含めたものがたくさんあります。

あぢさゐの花もとももの字を使つてゐるのは、空のお月様がちようどまんなまるになつてゐる頃、あぢさゐもまんなまるになつた。かういふことを感じさせようとしてゐるのです。なかなか昔の人は苦勞したものです。がそんなことは、文學の上ではむだ骨折りといふものです。それをまた、おもしろいと思つてゐてはいけません。

二三、思ひを抒べる歌

この人ひとには歌うたの上うへに、まだいろ／＼の試こころみがあつて、おもしろいことをしてゐるが、その一いち例れいをあげると、

月に吹ふく市いちの植うゑ木きの風かぜ高たかみ 塵ちりも残のこらず 霽はれし空そらかな

月に聴きく波なみの響ひびきも更ふけにけり。誰たれか うきねの袖そで絞しぼるらむ

月にうつ大城おほきの鼓つづみしばし待まて。くだちゆく夜よを、誰たれか 惜をしまぬ

かういふ一ひとつ續つづきの歌うたが、まだ／＼あるのですが、これだけにして置おきます。

月つきの照てつてゐる所ところに咲さいてゐる、町まちのとほりに植うゑてある木きに、當あたるところの風かぜの音おと

の高たかさに、なるほどひどい風かぜだと思おもつて空そらを見ると、吹ふき上あげられた塵ちりも、どこへ行い

つたかわからぬほど澄すみきつて、霽はれきつてゐる月つきの空そらよ。

月光げっこうの照てらす下もとに聞きこえて來くるその波なみの響ひびきも、思おもへば夜よの更ふけた感かんじのすることだ。か

うした晩ばんに、この海うみに舟ふな旅たびをして、船ふねの中なかで目めの覺さめてゐる人ひともあらう。そして水みづ

の上うへに浮ういて寢ねてゐる袖そでを絞しぼるほど、涙なみだで濡ぬらしてゐるだらう。

月の輝つきいてゐる空そらに響ひびくお城しろの太鼓たいこ。それは、もう門限もんげんだといふ知らせなのです。
 だがまう暫しばらく、打うつのを待まつてくれと感かんじるのは、現げん在ざいの心持こころもちのなくなるのを
 惜をしむ心こころなのです。それにも拘かはらず、太鼓たいこはどん／＼鳴なつてゐます。それに對たいして、
 なるほど夜よはだん／＼更ふけて行ゆくが、この更ふけて行ゆく夜よを惜をしまない人ひとが、誰たれ一人ひとり
 としてあらうか、とかういふ心持こころもちです。
 全體ぜんたい月に何なに々といふふうに、頭かしらに句くを置おいてゐるために、幾いくぶん分ぶん歌うたが上調うはちよう子しにな
 つてゐるが、眞底しんそこにはやはりよいものがあります。市いちといつても、今いまの市場いちばではなく、
 商しょう人の店みせを列つらねてゐる町通まちどほりで、そこには、今いまの街路樹がいろじゆに似にたものを植うゑたので
 す。それは古いことふるで、この歌人かじんのゐた時分じぶんのことではないが、歌うたの上うへではかういふふう
 に、現代げんだいを古いものふるに爲したて、作つくることもあつたのです。まああなた方がたにわかり易やすいた
 めには、東とう京きやうの銀座ぎんざの外ほか、街路樹がいろじゆの植うつてゐる商店街しょうてんがいの、夜よふけて騒さわいでゐ
 た人ひとも、寢静ねじづまつた後の月光のちげつこうを思おもひ浮うかべて見みればよからうと思おもひます。
 浮うき寢ねといふのは、水鳥みづとりが、波なみの上うへで寢ねることから移うつつて來きて、人間にんげんにも、舟旅ふなたび
 の夜泊よどまりの場合ばあひに用もちひます。それにも、うきねといふ言葉ことばに憂うきといふ厭いやな、情なさけない悲觀ひかん
 すべき意味いみの言葉ことばが、音おんから感かんじられる習しゆう慣かんになつてゐます。この歌うたも内容ないようよりは、

調子が流れすぎてゐるのですが、作者が月の晩に、さびしい心になつて、外にもかうした人があるといふことに思ひ及してゐる心持ちが、この人をなつかしく感じさせます。大城の鼓といふのは、和歌山城の『時』の太鼓です。

この歌は別に深く思ひこんでゐるのでもない樂しみを、ぢつと續けてゐたといふだけの物ですから、調子と意味とがぴつたりとしてゐます。さうしてこれらの歌は、皆歌つて氣持ちの好いように、調子が調つてゐます。

沖さけて 浮ぶ鳥船。時のまに翔りも行くか。いさな見ゆらし

熊野の山めぐりをした時の歌ですが、沖遠く離れて浮んでゐる鳥のような船、それが今、そこをつたかと思ふと、瞬間の目も及ばない遠いところにかけて行つてゐることよ。それは鯨が見えたに違ひない。

こんな歌になると、自由で浮れるような調子が、ぴつたりともりを衝く鯨船のすばやい動作を表すに適當してゐるではありませんか。鳥船といふのは大昔の國語で、船の名前でもあり、同時に舟についていらつしやる神様のお名前でもありました。あなた方ならば、船が早いから鳥に見立てたのだと思つて置いてさし支へありません。熊野の鯨つきの歌です。

二四、香川景樹
 かがはかげき

この諸平のゐた時分に、近世でもっとも名高い香川景樹といふ歌人が京都にゐました。非常に上手の評判があり、門人も多く、その一門は榮えて今までも續いてゐるほどの人でありました。明治天皇のお師匠番になつた人も、この流れのものであります。そのためにたいへん名人のように感じられてゐますが、これもまた、評判と實際との價値の違ふ生きた手本で、この人の歌にはほとんど文學としてねうちのあるものは見えません。まづ一例を取つて申しませう。

春日野に若菜を摘めば、われながら 昔の人のこゝちこそすれ
かすがの わかな つつ むかしひと
 これはこの人のものでもいゝ部類の歌です。けれども、先の諸平に似た歌があるのと並べて見ませう。

曳馬野の木の芽はり原。入り亂れ、春日くらすは、昔人かも
ひくまの こめ はら いみだ はるひ むかしびと
 景樹のは、『歴史的にいろゝな記念のあるこの春日野で、自分が若菜を摘んでゐると、昔の人も、かうして若菜を摘んでゐただから、うっかりすると、自分でゐて昔の人

のよきうな氣きがする』といふのです。おもしろいと思おもふでせうが、これは説せつめい明めいでおもしろく見みえてゐるので、歌うたその物ものは、たゞさういふおもしろさを考かんがへて見みたゞけで、ほんとうに氣き分ぶんの上うへにまで、昔むかしの人ひとになつた心こころ持もちがで出でてゐません。これを知識ちしきの上うへの遊あそびといひます。それと、もに、氣き分ぶんが少すこしも伴ともなはないのですから、散さん文ぶん的てきな歌うたといはねばなりません。殊ことにわれながらといふのは、いかに常じょう識しき的てきで、自じ分ぶんで知しつてゐて、わざとそんなことをいつたゞけだといふことを見みせてゐます。

それと比くらべて見みると、諸もろ平ひらのはさすがにもつと熱ねつ情じょうがで出でてゐます。自じ分ぶんが昔むかしの人ひとか知しらんとかう疑うたがつてゐるので、その疑うたがひの起おこる導みちびきとして、『曳ひく馬ま野の——萬まん葉よう集しゅう』などに見みえてゐる土地とちで、濱はま松まつから北きたへかかかけての平へい野やち地ち方ほう——の木この芽めが新あたららしく出でてゐる。——そのはると、はりの木きのはりとをひつかけて歌うたつたもの——はりの木き原はらにめちやくちやにいりこんで、この春はるの日ひを一日いちにち遊あそんでゐるのは、あの萬まん葉よう集しゅうに出でて來きてゐる人ひとたちなのか知しらん』と疑うたがつたので、その一人ひとりとして、諸もろ平ひら自じ身しんも含ふくめていつてゐるわけです。

景かげ樹きの歌うたの方ほうが、皆みんなにわかりやすからうと思おもひますが、そこが散さん文ぶんと詩しとの違ちがふところころで、意い味みの上うへからおもしろいことが、きつと詩しや歌うたの完かん全ぜんななうちをきめるものだと

いふわけにはいけないのです。世間のものを見ても、誰にもわかるものが、きつとよい文學藝術であると思つてゐる人もあるが、それは大へんな間違ひであるといはねばなりません。景樹のことはこれでよします。

景樹などが騒がれてゐたかげに、評判にならずにゐた人が、まだくありました。その一等目につく人は、越中富山の橘曙覽であります。この人は明治以後の新派の和歌といふものに、非常な影響を與へた人ですが、それまではあまり人から騒がれなかつたのです。江戸の末から明治の始めにかけて生きてゐた人です。いひ傳へては、大へん貧乏な暮しをしてゐて、しかも國學や歌の樂しみを捨てなかつた人であります。この人にも、諸平同様同じ句をはじめに据ゑて詠んだ歌があります。

二五、 橘曙覽

中でも、『獨樂吟』といふのは、五十首からもあります。名高いものだから、そのうち、六七首竝べておきませう。

樂しみは、草のいほりのむしろ敷き、ひとり心をしづめをる時

樂しみは、すびつのもとにうち仆れ、ゆすり起すも知らでねし時
 樂しみは、めづらしき書人に借り、はじめ一枚 ひろげたる時
 樂しみは、妻子むつまじくうち集ひ、頭竝べてものを食ふ時
 樂しみは、心に浮ぶはかなごと 思ひつゞけて、たばこ吸ふ時
 樂しみは、晝寝めざむる枕に、ことくと湯の沸えてある時
 樂しみは、乏しきまゝに人集め、酒のめ ものを食へといふ時
 樂しみは、童墨するかたはらに、筆の運びをおもひをる時
 樂しみは、神のみ國の民として、神のをしへを深くおもふ時
 かういふふうに、最後の句を皆『時』でをさめてゐます。恐らく口から出任せに、大し
 て苦勞なしに作つたとおもはれますが、それが皆下品でなく、あつさりとはがらかに明る
 い氣持ちで詠み上げられてゐます。この外、樂しみの歌はありますが、年の若いあなた方
 にはわかりにくいものは省きました。これらの歌ならば、あなた方にも大體わかりませ
 う。そして年が行くと共に、これらの歌の味ひが、變つて感じられて來るのです。だから
 まづ暗記しておいてほしいとおもひます。

一番はじめの歌は、蓆を敷いて、そこに坐りこんで、ちつとしてゐる心の寛ぎを喜ん

であるのです。

たばこの歌で、はかなごとゝいふのは、考へなくてもよいようななんでもない、軽いことゝいふことです。これはやはり、大人でないとわからない氣持ちです。第一あなた方にはたばこを吸ふ人の氣持ちがわかるはずがないのです。貧乏ながら、こせつかずに暮してゐたことは乏しきまゝの歌を見て、いかにも人なつかしい、善良なこの歌人の性質が思はれます。

やはりあなた方にはわかり難い興味かも知れませんが、わらはすみするなどの歌は、ぢつくりと落ちついた、そしてなんともいへない心のはづんでゐるのが感じられるものです。

最後の歌は、よく世の中の人の作りそうな道徳的な歌ですが、この人は眞底から、さう考へてゐたゝめに、人から頼まれて作つたといふような浮いたところを見せてゐません。ことに、神のをしへを深くおもふ時、などいふ味ひは、これから先、あなた方にだんだんわかつて來るだらうと思ひます。

この人は、また物の名前ばかり集めて、一首の歌を作つてゐます。

木樵り歌 鳥のさへづり 水の音 ぬれたる小草 雲かゝる松

山 中といふ題です。山 中目に見、耳に聞えるものを五とほり並べて、そしてその静かな山の様子を考へさせようとしたのです。けれどもこれは、和歌ではまづ出来ない相談で、恐らくこの人が、かういふふうな思想の表し方をする俳句にも、興味を持つてゐたから出来たものなのでせう。どう考へても、この五つの現象が、一つの完全な山のありさまに組み立てゝ感じられては來ません。こんな人ですから、時々、おどけた歌を作つて、人を笑はせようと思いました。そしてやはり、下品すぎるといふ程でなく出來てゐるのは、人格によるのです。

着る物の縫ひめくくに、子をひりて、虱の神代はじまりにけり

わたりの縫ひめに頭さし入れて、ちゞむ虱よ。わがおもふどち

やをら出でゝ、ころもの首を這ひ歩き、我に恥ぢ見る虱どもかな

昔の人は、虱となじみが深かつたゝめに、なんでもなく、かういふ歌を作つてゐます。

そして汚らしいあの 昆虫を憎んでばかりもゐません。

最初の歌は、少しおどけ過ぎて、下の句などはわるいとおもひます。二番めのわがお

もふどちは、おれの仲よしだといふくらゐの意味で、おれだつて虱とおんなじことだ、と

まるで、綿入りの着物の縫ひめに、頭をつゝこんで縮かんでゐる虱ばかりを笑ふことは出

來ないといふのです。それを深くおもひ込んだようにいはずに、軽く詠みすてゝゐるのです。

『やをら出でゝ』といふのは、少し説明しすぎてゐますが、下の句の方になると、いかにも自分の人からうけた恥づかしい經驗を、そのまゝ軽い心で歌つてゐるところが見えて、わるい歌ではありません。この人の先生は、加納諸平と同門の田中大秀といふ飛驒の國の學者でした。その師匠を訪うた時の旅行の歌。

旅 衣うべこそさゆれ。乗る駒の鞍の高ねに、み雪つもれり

旅装束をとほして、寒さが身に應へると思つてゐたが、なるほど冷やついたはずだ。あの向うに見える、乗るこまの鞍といふ名まへの乗鞍の高山に、雪が積つてゐる。

この人は、この山を甲斐の國乗鞍山と書いてゐるが、これはやはり只今の飛驒山脈（日本アルプス）の中あの山でせう。この歌はどうかすれば、馬に乗つて旅をしてゐて、それをすぐさま枕詞として、鞍の高ねといったようにも思はれるが、さう考へてはいけません。

二六、大隈言道

尚明治より前の歌人として、忘れることの出来ないのは、福岡の人、大隈言道であります。この人も曙覽のように軽く明るくあまり考へないで、自由に歌を作つたらしい人であります。やゝおもしろさにつり込まれて、下品な歌もありません。けれども、歌よみとしては勝れた人といふことが出来ます。ことに子どもらしい氣持ちを歌に自由に詠みこんだ人で、そんなのになると、ついでよいわるいを忘れて、同感せずにもられません。しかし曙覽の歌で、さういふ種類の歌をあげすぎましたから、こゝでは、まじめなものを二三首並べるだけにしておきませう。

うちわたす をち 方人の、道おそく行き果つまじき 野の景色かな

これも、歌には少ない材料で、春の野の霞んで果てがなく感じられる上に、皆の心ののんびりしてゐる氣持ちが、よく出てゐて、しかも非常に古風に上品に出来てゐます。

うちわたすは、見渡すといふくらゐの意味。をち方人といふのは、向うの方を歩いてゐる人。道おそくとは、足がはかどらないでゐる様子を少々變つたいひ廻しでいつた

のです。つまりさうしないと、平凡へいぼんに上うすべりがすると思つたのでせう。だから、直ちよく譯やくして、道みちがはかどらないでと取とつておけばよいでせう。とても今日こんにち一日いちにちでは行きゆきるまい、といふ氣持きもちちを、行き果はつまじき野のの景色けしきかな、とかういつたのです。今いままでの歌うたと違ちがつて、重おもくするしいけれども、やはりよい感じかんがするでせう。

かへり來きて、寢ねたるわらべの袂たもとより、頭あたま出まだせるつく／＼しかな

かへる雁かり、かへりて春はるもさびしきに、わらはのひろふ小田をだのこぼれ羽は

この人ひとは子こどもがすきだつたゝめに、同時どうじに、子こどもが讀よんでもわかるような歌うた、或あるひは自分じぶんが幼をさない氣持きもちちになりきつて作つくつたものがたくさん出來できたものらしく思おもはれます。

春はるになると雁かりが、北きたの方ほうへ歸かへります。その後あとに、雁かりの羽はねが、田圃たんぼなどによく殘のこつてゐます。それを子こどもが拾ひろつておもちゃにして遊あそんでゐるのを作つくつたので、さういふ材ざいり料りょうをごく重おもくしく爲しあげてゐるのです。春はるに歸かへる雁かりが、歸かへつてしまつた後のち、花はなは咲さいても子こどもは雁かりの姿すがたが見みえないので、『がん／＼竿さになれ棒ぼうになれ』といふ童謡どうようを謠うたふことも出來できないでゐるその子こどものさびしい氣持きもちちを、春はるもさびしきといつたので、大人おとなの作さ者しや自身じしんの氣持きもちちを述べたのではありません。さういふ場合ばあひに、そんな子こどもが、田たにおりて行いつて、雁かりのこぼして行いつた羽はねを拾ひろつて喜よろこんでゐるといふ歌うたです。それをすつかり、

大人おとなの側がはから見てみ作つくつてゐるのです。

も一つ、子どもを種たねにしなから、重おもい歌うたをあけておきませう。

わが身みこそ何なにとも思おもはね。めこどもの憂うしてふなべに、うきこの世よかな

これも、あなた方がたにわかりにくい氣持きもちちかも知しれません。がお父とうさんお母かあさんの年としごろになると、家の生せい活かつが、よくてもあしくても、なんだか社しゃ會かい的てきの暮くらしといふものが、重荷おもにに感かんじられて來くるものです。さういふ年としごろになると、この歌うたを詠よんだ言とき道みちの心こころ持もちがわかるでせう。

言とき道みちもやはり、曙あけみ覽どう同よう様のまつ貧くしい暮くらしをしてゐました。けれどもそれについて普ふ通つうの人ひとでありませんから、大たいして氣きにかけたりあせつたりはしてゐなかつたのです。が時とき々／＼、もつとよい暮くらしがしたいといふ氣持きもちちが起おこらなくもありません。それは多おほくは家か族ぞくのものたちが、主しゅ人じんに訴うつた場合ばあひ、或あるひはさういふ心こころ持もちを顔かほに現あらはしてゐる場合ばあひに起おこつて來きる氣持きもちちなのです。

自分じぶんはそれはなんとも思おもつてゐないが、しかし、時とき々／＼悲ひ觀かんすべき世せ間けんだ、とおもふ氣きがする。自分じぶんの妻つまや子こが、厭いやだくと世よの中なかのことをいふにつれて、厭いやに思おもはれるこゝの世よといふのです。

少^{すこ}しもの足^たらないところもありますが、家^{いへ}の主^{あるじ}の持^もちそう^なな氣^き持^もちをよ^くい^つて^るま^す。
 な^べに^とい^ふ語^ごは、そ^れと^共に^と同^{どう}時^じに^など^いふ^い意^い味^みで^すが、こ^の頃^{ころ}の^ひ人^{ひと}は、輕^{かる}く^ゆゑ^に
 と^いふ^くら^ゐる^の意^い味^みに^も用^{もち}ひ^たの^です。以^い上^{じょう}の^ひ人^{ひと}々^々で、江^え戸^ど時^じ代^{だい}の^か歌^か人^{じん}を^代表^{だいひょう}
 さ^せた^つも^りで^す。

青空文庫情報

底本：「歌・俳句・諺」復刻版日本児童文庫、名著普及会

1982（昭和57）年10月20日発行

底本の親本：「歌・俳句・諺」日本児童文庫、アルス

1930（昭和5）年1月10日発行

※底本は旧字旧仮名づかいです。なお拗音、促音の大書きと小書きの混在は、底本通りです。

入力：しだひろし

校正：沼尻利通

2015年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌の話

折口信夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>